巻頭言

ウィリアムソン教授の日本近代化への功績

東ソー・ファインケム株式会社　代表取締役社長　江口久雄
Hisao Eguchi

ロンドン大学(UCL)のアレキサンダー・ウィリアム・ウィリアムソン教授(A. W. Willamson, 1824～1904 年)は，著名な有機合成化学者であり，非対称エーテル合成法(ウィリアムソン反応)の開発者として広く知られている。一方，ウィリアムソン教授は，明治維新後の日本近代化にも大きな貢献をしたが，その経緯を詳しく知る人は少ない。

私は，明治維新胎動の地である山口で有機合成研究に携わってきた。そうした背景から，本協会員の皆さんにウィリアムソン教授の日本近代化に向けた功績を簡単に紹介したい。

長州ファイブ(伊藤博文他)との関わり

鎖国政策が続いていた江戸時代末期(1863 年)，長州藩は西洋の近代文明を探るため，5 人の若い藩士(長州ファイブ)を密かに英国に派遣した。

長州ファイブを自宅に下宿させ，日常生活から英会話指導，大学留学(聴講生)まで全ての世話をしてくれたのがウィリアムソン教授である。ウィリアムソン教授は，父親が東インド会社に勤務していた影響で，アジア新興国(日本)に興味を持ち，長州ファイブの教育支援に尽力した。大学での聴講に加えて，当時の最新施設(工場，鉄道，造船所，造幣局等)を 5 人に見学させ，近代文明を直に学ばせた。伊藤博文(初代内閣総理大臣)をはじめとする長州ファイブは，ウィリアムソン教授の献身的な教育支援により，明治維新(1868 年)後の日本近代化に大きく貢献する人材に育っていった。

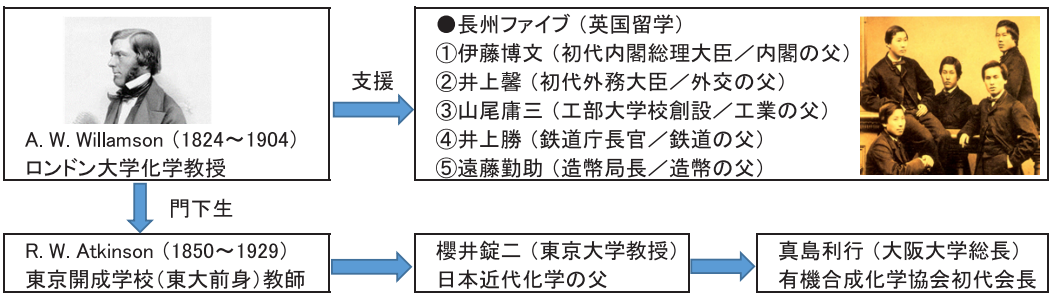
近代化学者(櫻井錠二他)との関わり

ウィリアムソン教授は，明治維新直後の時期に，門下生であるアトキンソン教師(R. W. Atkinson, 1850～1929 年)を東京開成学校(東京大学の前身)に派遣し，日本の若い学生達に対して，近代化学の教育にあたらせた。

「日本近代化学の父」と呼ばれる櫻井錠二(1858～1939 年)もアトキンソンから，近代化学(有機化学他)を学んだ一人である。その後，櫻井はロンドン大学に留学し，ウィルアムソン教授の指導の下，有機水銀化合物の研究に取り組んだ。櫻井はロンドン大学で優秀な成績を収め(化学成績 1 位)，大学から奨学金を授与されている。櫻井は留学からの帰国後，東京大学教授になり，理化学研究所の創設など研究インフラの拡充にも力を発揮した。

櫻井は東京大学や理化学研究所での指導を通じて，多くの化学者を育てた。門下生としては，うまみ成分(グルタミン酸ナトリウム)を発見した池田菊苗，漆の主成分(ウルシノール)を構造決定した真島利行が有名である。真島は，有機合成化学協会の初代会長を務めた。

最後に

明治維新後の日本近代化の裏には，英国の偉大な有機合成化学者の献身的な教育支援があった事実を，日本人(特に有機合成化学者)は決して忘れてはならない。そして，本協会員の皆さんがウィリアムソン教授の精神を受け継いで，新しい時代をリードするような「研究開発」と「人材育成」を実践していくことを期待している。

(2024 年 3 月 4 日受理)